
鍵

新品の靴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鍵

【Nコード】
N8905N

【作者名】
新品の靴

【あらすじ】
2011年、とうとうアナログ放送が終わり地上デジタル放送へ変わろうとしていた。

2011年、とうとうアナログ放送が終わり地上デジタル放送へ変わろうとしていた。

「おい、あと数分でアナログ終わるぞーっ」
父さんがそう宣告した。

うちはまだデジタルに変えていない。
正確には。

あと、あと少しの設定で地上デジタルへ移行できるのだ・・・！！

「・・・3、2、1、アウトオオ！」

「できた！」

設定の完了とアナログ終了はほぼ同時だった。

そしてテレビには・・・

映っていた。

でも、それは、NHKでも民放でもなく。

一つの、世界だった。

地球と似たような別の惑星。

画面の遙か向こう側で生物と思しきものがうごいている。

「・・・これって・・・何の番組だ？」

啞然とする家族一同。

父さんが急いで新聞のテレビ欄を確認する。

「これ何ちゃん？」

姉がリモコンを押すがテレビは無反応。

「・・・おいおい、こんな番組やってないぞ。」

空気が凍りつく。

ざざ・・・

と、音声が入り始める。

・・・？

突然リビングに柔らかなメロディーが流れ始める。

発信源はもちろんテレビ。

「すごい綺麗な旋律・・・。」

音大に通う姉ですら感嘆の声を上げる。

「どうなってるんだ・・・。主電源を抜いてみるか。」

「待って！」

そう叫んだのは他ならぬ僕だった。

「どうして？突然こんなになって気味が悪いじゃないか。」

「ちょ・・・ちょっとだけ待って。このメロディー・・・敵意はないよ。」

「敵意って・・・あんたねえ・・・。父さん、はやく切っちゃってよ。」

」
母さんは薄気味悪そうにテレビを見る。
「あっ！ちょっと待って！あれを見て！」

どん・・・

何かが打ち上げられた・・・

その物体はこっちへまっしぐらに飛んでくる。

そして・・・

「テレビから離れろ！！」
父がそう叫ぶ。

パン・・・！

と、拳銃の発砲音のような鋭い音が。

イイイイイイン・・・

耳鳴りでみんなの声が聞こえない。

みんな大丈夫なんだろうか・・・

ゆっくりと目を開けてソファの陰からリビングの様子を窺う。

・・・良かった。誰もけがしていないようだ。

リビングの状態は悲惨だった。

テレビから打ち出された物質の衝撃波で壁が崩れいろんな物が散乱している。

・・・か！み・・・うぶか！みんな・・・じょうぶか！

父が必死で叫んでいる。聴覚が少しずつ戻ってきた。

「僕は大丈夫！」

「私も！」

「あたしも！」

「・・・よし、」

意外なことに、テレビの画面はかすり傷一つなく元のままだった。

あれはなんだったんだろうか・・・

ヴヴヴヴヴ・・・

何かが振動する音が聞こえる。

「何この音・・・？」

「しっ、静かに。・・・こっちだ。」

父の指の差す方向は予想通りテレビの真向かいの壁。

「警察を呼んだほうが・・・。」

「まあ待て。」

好奇心の強い父はこの振動の主、向こうの世界からやってきた物質が気になって仕方がないのだろう。

壁の奥には真っ白な球体が浮かんでいた。

傍に落ちていた壁の破片で恐る恐るその球体を突く。

コッソ。

綺麗な音がしてその球体は振動と浮上を停止した。

父がなんども突いてから恐る恐る触り、ひとまずは安全であることを確かめてゆっくりと取り出す。

純白とはまさにこのことを言うのだろうか。

真っ白の綺麗な球体だった。

僕も恐る恐るついてみる。

コッソ。

やけに音が響く。

カシャ

え？

カシャカシャカシャカシャ

えええええ？

みるみるその球体は形を変えていく。

カシャン

「・・・鍵？」

「そう・・・みたいだな。」

「なんの？」

姉がいらいらしながら聞く。

姉はわからないことが大嫌いなのだ。

この状況は彼女にとってあまりにも酷だろう

なにしろ訳がわからないんだから。

「・・・と、いうわけですねー」

バラエティーの司会者が画面に大きく映りだす。

「地デジに移行・・・できたのか？」

こんな状況で父はアホなことを言う

「そんな場合じゃないでしょ！これどうなってんのよ・・・！一体何が起こったの！？」

姉がヒステリックに父に噛みつく。

「わからん・・・わからんが、終わったことは確かだ。」

「警察を呼んだほうが・・・」

「急にテレビから何かが発射されて私たちはそれで死にそうになりましたって？どうせ信じてやってくれないよ。」

「でも・・・」

そこからは特にすごいこともなく、リビングを片づけて壁を修理してから普通の日常に戻った。

なにこともなく。

元に戻った。

ただ、あの鍵は僕が持つことになった。

どうして父ではなく僕が触った時球体から鍵への変形がおきたのか。

答えは出なかったが、この時はみんな一致で僕が保管することになった。

時が経つのは早い。

あのことが起きてから、もう60年になる。

私はすっかりおじいちゃんだ。

あの時の鍵はいつも首からぶら下げている。

そして今、今そのことを本当に良かったと感謝している。

過去の自分が今に至るまでこの鍵を大切に保管していてくれて本当に良かった。

なぜなら、

なぜなら、箱が目の前にあるから。

特殊な鍵穴で、普通の鍵では絶対に開けられない。

普通の鍵では、ね。

興奮で震える手を抑えながらゆっくりと首から鍵を外す。

60年前に突如やってきた純白の鍵。

鍵穴に鍵を差し込む・・・

すんなりと、滑るように入っていく。

さあ、あとは回すだけだ。

ここまで、本当に
長かった・・・

がちやり

カラン

抜いた鍵が地面に落ちる

震える手でゆっくりと箱を開ける。

すると、そこには。

「ああ・・・。ああ・・・そうか・・・そうだったのか・・・」

涙が止まらない。

いままでいろんな鍵穴にこの鍵をさしてきた。そのたびに落胆してきた。

ずっと待って、とうとう鍵穴が一致する箱をみつけて。

「ああああ・・・生きてきて良かった・・・」

ずっと探し続けてとうとう見つけたもの。

「ああああああ・・・」

その場に崩れ落ちる。

子供に戻ったように泣きじゃくる。

「よ・・・良かった・・・見つかって・・・あ・・・ありがとう」

(後書き)

さて、あなたは箱の中身、なんだったと思いますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8905n/>

鍵

2010年10月12日04時32分発行